摩文仁ハンタ原縄文人の 1 次埋葬地を推測する

松下孝幸*

【キーワード】：沖縄県、縄文時代後期、崖墓、岩陰、縄文人骨、1 次葬、2 次葬、集骨

はじめに

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムと糸満市教育委員会および特定非営利活動法人人類学研究機構は、沖縄県糸満市にある摩文仁（まぶに）ハンタ原（ばる）遺跡で 2007 年から 2010 年までの 4 年間、発掘調査をおこない、岩陰から集骨状態の縄文時代後期人骨を貝製装身具類とともに多数発掘した (松下・他、2009、松下・他、2011)。その目的は、南西諸島の縄文人のルーツを探ることと、この地域で縄文人と弥生人とが連続するかどうかを検証することであった。すなわち沖縄の縄文人は旧石器時代人 (港川人など) が小進化した人々なのか、それとも九州から南下した縄文人なのかを明らかにするために、できれば縄文前期人骨の出土を期待して、調査をおこなったが、摩文仁ハンタ原遺跡からは縄文後期人骨のみしか発掘することができなかった。しかし、沖縄県では保存良好な縄文後期人骨の出土量はきわめて少ないことを考慮すれば、本縄文後期人骨は南西諸島の人類学研究にとってきわめて貴重である。

1．摩文仁ハンタ原遺跡の概要

本遺跡は、沖縄県糸満市字摩文仁ハンタ原 547 番地に所在する岩陰遺跡で、標高約 50m の海蝕崖下に立地し、標高約 30m の琉球石灰岩下の岩陰部とその前庭部から構成される。岩陰の南側には人骨の小片・細片と遺物が混在する厚さ 10cm ～ 30cm の層が存在し、岩陰の南西側に形成された深い裂け目では頭蓋や大腿骨などが、破砕されることなく原形をとどめた状態で集積されていた。人骨の堆積層の最上部からは 1 体（ST-1）の平安時代相当期の幼児骨が一部埋葬姿勢を保った状態で検出された。その下層からは間層を挟んで大量の人骨が貝製装身具類とともに出土した。なお、関節が連結した状態の人骨は存在しなかった。

調査区全景

人骨から放射性炭素年代 (AMS) を測定した。測定結果は、最上層の ST-1 人骨が 955 ± 30 BP で、中層人骨は 3820 ± 30 BP、下層人骨は、3720 ± 30 BP、3610 ± 30 BP、3940 ± 30 BP となり、平安時代人骨より下層の人骨については縄文時代後期の年代が得られた。土器片は 30 点出土したが、形式を判別できたのは大山式のみで、人骨の年代観とも矛盾しない。従って、本遺跡は縄文時代後期の埋葬遺跡である。

4 次に亘る発掘調査で出土した人骨のうち数がもっとも多かったのが下顎骨で、その数は少なくとも 85 体分存在することから、この岩陰には 85 体分（男 32、女 31、幼児 6、小児 9、不明 7）以上

の人骨が埋置されていたことになる。

男性の頭蓋長幅示数は 80.87（6 例）、女性は 82.61（3 例）となり、男女ともに頭型は短頭型であるが、短頭性は男女ともに著しく強いものではない。また、脳頭蓋の径は小さい。男性の上顔示数は 46.38（K）（1 例）、〔63.21〕（V）（3 例）で、女性の上顔示数は〔47.51〕（2 例）（K）、〔62.33〕（4 例）（V）となり、男女とも低顔である。男女とも顔面の高径は低いが、幅径がそれ以上に小さいので、上顔示数はそれほど小さい値とはならない。風習的抜歯は認められなかった。

男性の上腕骨は、沖縄の縄文人としては長さが長く、骨体の径も大きく、骨体はかなり扁平である。一方、女性上腕骨は長さは短く、骨体の径は大きく、男性同様骨体はかなり扁平である。男性の大腿骨も長さは沖縄の縄文人としては長く、骨体はやや細い。しかし、粗線や骨体両側面の後方への発達は比較的良好で柱状性が認められるものも存在し、骨体上部も扁平である。一方、女性大腿骨は長さが短く、骨体も細いが、骨体両側面の後方への発達は良好で、骨体上部はかなり扁平である。男性の脛骨は、骨体の径が小さく、骨体には扁平性は認められない。女性脛骨は沖縄の縄文人としては骨体は大きく、扁平ではない。沖縄では、縄文人脛骨は男女とも扁平性がかなり弱いか、ほとんど認められないという本土 (九州・本州・四国) とは異なった脛骨形態が認められる。

男性について、上腕骨と大腿骨の中央周の比 (上腕骨 / 大腿骨) を算出してみると、港川が 73.49、ガルマンドウ 79.42、真志喜安座間原 82.66、摩文仁ハンタ原 86.10 となり、本例は大腿骨体の大きさに比べて、上腕骨が太いという特徴が認められる。女性では、港川 73.10、真志喜安座間原 84.01、ハンタ原 80.16 となり、女性は男性ほど上腕骨は太くない。

大腿骨からの推定身長値は、男性は 159.42cm（4 例）、女性は 143.55cm（2 例）で、男性は木綿原弥生人（158.57cm）や西北九州弥生人なみ（158.79cm）の身長で、それほど低くはないが、女性は著しく低身長である。

屈強でかなり大柄の男性が複数体存在することを示唆する頭蓋や尺骨、橈骨が存在する。この屈強な縄文人の身長を尺骨最大長（UL-01、男）から算出したところ、168.80cm となった。大腿骨から算出するとすればどれくらいの値が得られるか検討してみた。宜野湾市の真志喜安座真原 39-A の大腿骨と尺骨の最大長の比を、この尺骨に適用して大腿骨最大長を算出したところ 480mm となり、この値を用いて Pearson 式から算出すると推定値は 171.55cm に、藤井式では 173.46cm となり、170cm を超える値が得られた。沖縄県で身長が 168cm もある縄文人は存在しない。日本本土でも 170cm に近い縄文人の例を聞いたことがない。

２．１次埋葬場所はどこか？

縄文後期人骨はすべて集骨状態で検出された。しかも 1 体分全身の骨がここに集められたわけではない。頭蓋、大腿骨、脛骨、上腕骨、尺骨、橈骨などの大型で長い骨（長骨）がほとんどで、椎骨、肋骨、寛骨、手の骨、足の骨はきわめて少ない。どこか別の場所で肉（軟部組織）を腐らせ、骨になってから、死者の遺骨の一部を岩陰奥の裂け目へ集めている。

トレンチ調査で、岩陰の南側では、骨の小片、細片が貝製装身具類と混在する、厚さ 10cm ～ 30cm の層が存在することがわかった（図 2 第Ⅱ層）。当初、これは戦没者の遺骨収集の際に掘り出

図１　摩文仁ハンタ原遺跡　調査区平面図

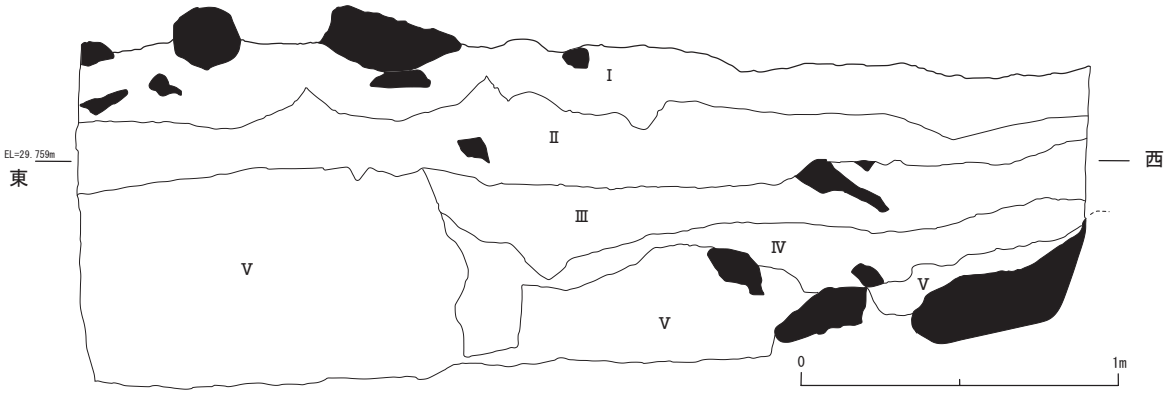

図２　Ｂグリッド第１トレンチ南壁層序

した人骨片が堆積したものと思ったが、広範囲にしかも一定の厚さの層をなしていることがわかり、遺骨収集とは関係ないことが判明した。１年目の発掘調査時は、この層が何を意味するのか、理解できなかった。これまでの沖縄での長きに亘る調査で、縄文時代から近世に至るまで沖縄では、岩陰や崖下の隙間に集骨という形態で人骨が処理されていることを知っていたが、１次葬を特定できたという話は聞いたことはなかった。以前から、１次葬の場所はいったいどこなのか、そしてそれはどうしたら１次葬の場所と特定ができるだろうか、を考え続けてきた。

２年目の調査時に、骨の小片、細片が遺物と混在する層の解釈を考えていた時に、この状況は窯跡周辺にみられる「ものはら」に酷似していることに気がついた。「ものはら」とは焼成に失敗した陶磁器や出来映えに満足できなかった製品を破砕し、ばらまいた跡である。この状況こそが「１次葬の場所」を示していると思うに至った。均等の厚さで堆積した小片などの堆積層は「死者の１次埋葬場所である」ということを示唆していた。

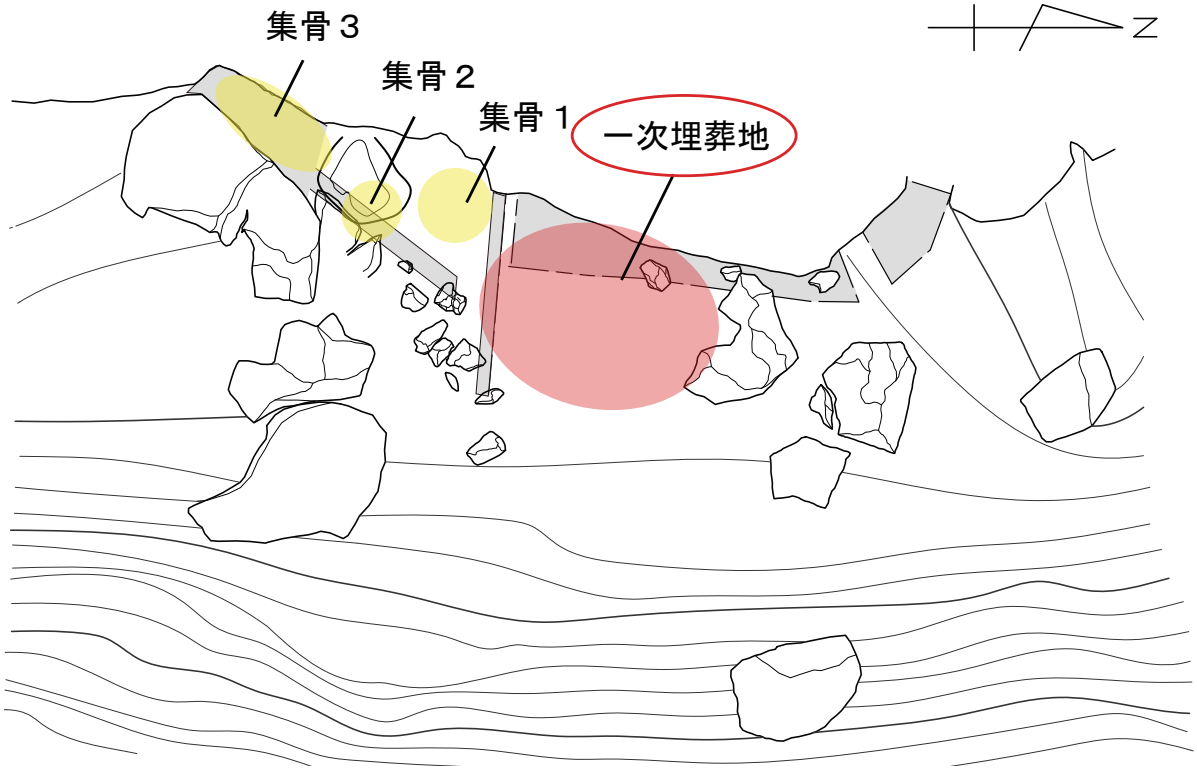

図３　調査区

３．遺体の処理方法

死者が出ると、岩陰の南側の平坦部（前庭部）に遺体を置き、肉などの軟部組織を腐らせる。骨になる間に、獣に手足の一部を持ち去られたり、鳥などに啄まれたりして、人体の一部が失われたかもしれない。やがて骨になったら、その一部を深い裂け目へ収め、土を被せた。これで葬送儀礼は終了した。埋納されないでその場に残された人骨は不要な人骨である。そのまま放置されたか、あるいは踏みしだかれたかもしれない。次の死者はこの上に安置され、骨になるまで放置され、同じような処理が継続しておこなわれる。この１次埋葬場所では、埋納されなかった人骨片が散乱し、次第に層をなすようになる。窯跡の「ものはら」状態を呈するようになったのである。

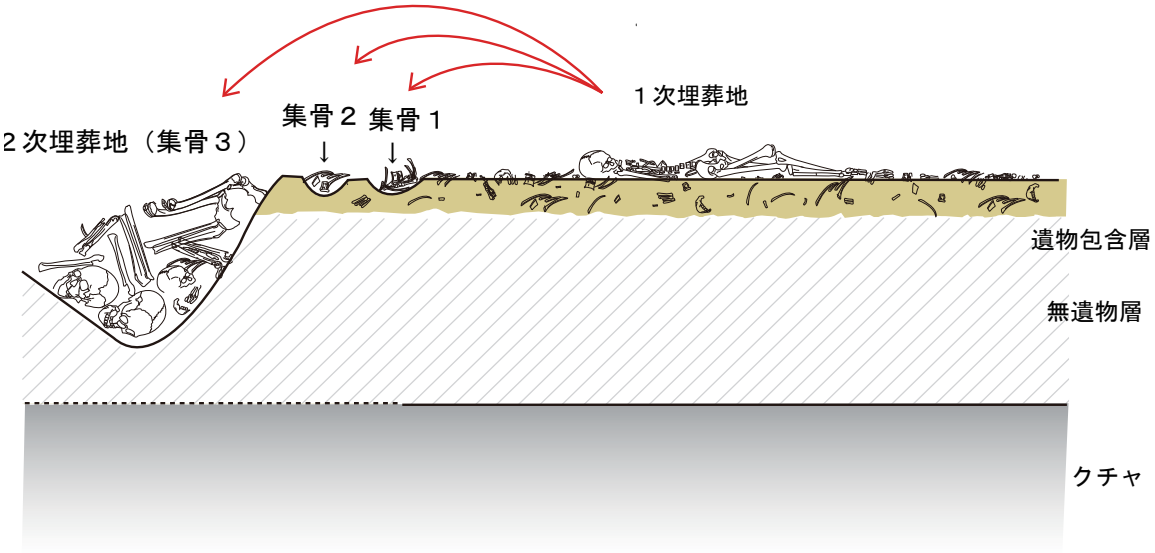

図４　遺体処理模式図

４．なぜ、一部の人骨しか埋納しなかったのか

死者の骨は、一部しか別の場所に埋納されていない。それはなぜか。この葬送儀礼は「ヒトとしての形」を崩し、もとの形に戻らないようにするためにおこなう行為なので、頭蓋や大腿骨などの大きい骨を外し、外した骨がもとに戻らないようにするために別の場所に移動し、土をかぶせ、隠匿した。肉を腐らせても骨は関節で連結した状態なので、まだ「ヒトの形」を保ったままである。この状態は「この世」と「あの世」との間で、死者はまだ「あの世」にいっていない。死者を「あの世」に送るためには「ヒトの形」を崩し、この世からヒトとしての存在を消し去る必要があった。「あの世」に確実に送ってやらなくては再生ができない。骨の一部を抜き去り、別の場所に隠し、土を被せ、見えなくし、残った骨を撹乱することは、人体としての配置を乱し、「この世」と「あの世」をさまよっている魂を確実に「あの世」に送ってやる一連の葬送行為であった、と解釈したい。残存していた骨のなかでもっとも数が多かったのは下顎骨である。下顎骨は目に付きやすし、顎を外してしまうことによって、「しゃべる」ことを妨げ、「食べる」ことを不可能にした。手足の関節を外してしまう前に、まず下顎骨を取り外して、岩陰の裂け目に隠匿したために、下顎骨がもっとも多く残存しているのであろう。

5．今後の課題

摩文仁ハンタ原遺跡で、人骨の残存状態などから、一次埋葬場所と葬送行為を推測してみた。これは摩文仁ハンタ原遺跡における推測であり、解釈である。今後、崖墓や岩陰での調査では前庭部での調査もおこなうなど 1 次埋葬場所を特定し、この仮説を検討していく必要があろう。

≪参考文献≫

1. 松下真実、2009：沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡出土の縄文人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 4 号：42-57.
2. 松下真実・他、2011：沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡出土の縄文人骨 (2)。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 6 号：28-49.
3. 松下真実・他、2012：沖縄県摩文仁ハンタ原遺跡出土の高身長縄文人。西海考古第 8 号 (故福田一志氏追悼論文集)：93-98.（発行：西海考古同人会）
4. 松下孝幸・他、2009：沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告 (1)。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 4 号：1-58.
5. 松下孝幸・他、2011：沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告 (2)。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 6 号：1-50.

＊ Takayuki　MATSUSHITA　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

調査の様子

人骨の出土状況